

<p>上演 5</p> <p>2022年7月31日(土) 5校目</p> <p>近畿 ブロック (兵庫県)</p> <p>兵庫県立 伊丹 高等学校</p> <p>「晴れの日、曇り通り雨」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(岡山県) 岡山学芸館高等学校</p> <p>古井 栞音</p>
---	--

日々、たくさんの人と関わりながら生きている私たちは、人々との関係に名前を付けていく。では、どのような人を友達とみなすのだろうか。この問いには人の数だけ答えがあるということを感じさせてくれた作品であった。

園芸部の活動場所である、校舎裏の花壇を舞台に物語は進む。友達を作るために嘘をついてしまうアイと、植物のみが友達というナツキ、そして皆に敬語を使うハジメ。別れの象徴でもある卒業式という“ハレの日”、そんな日に会った3人が打ち解けていく様子は心温まるものであった。

生物部のミツキの「花を別の場所に植え替えてくれ」という要求を巡る騒動は、3人の関係性が変わる大きなターニングポイントになっていたように思う。ナツキが大事にしている植物たちを守るため、3人は必死に奮闘していた。さらに、ハジメは慣れない怒りをミツキにぶつけ、アイを守った。これらは、距離が近くなったことを感じさせる出来事であった。また、ミツキは「しゃあない」と口癖のようにつぶやいた。これに対してアイが放った、「しゃあないの中で悲しい想いをしている人がたくさんいて、どうしようもないからこそ声を上げられないだけかもしれない」という台詞は私たち講評委員の心に突き刺さり、響いた。感染症の流行により、様々な制約の中で高校生活を過ごしてきた私たちにとって、「しゃあない」「仕方がない」という言葉は聞き慣れたものだ。その言葉にどこか苦しさを感じつつも何も言い出せなかった人にとって、アイの言葉は大きな救いであっただろう。声をあげられない存在という点では、植物にも共通するところがあるのだと感じた。声なき存在の意思を汲み取ることの重要性和困難さについて考えさせられる機会となった。

通り雨が降り出し、アイとナツキは1つの傘に入って会話を交わす。ここでアイは、嘘をつくことをやめる。ナツキもミツキとの対話の意思を表明する。雨雲のせいで辺りは薄暗くなっていたが、2人がいるところだけは光が当たって明るくなっており、お互いの気持ちが晴れやかになっているように感じた。ハジメも遅れて現れ、知らず知らずの間に敬語を使わなくなっていた。これは、ハジメにとってアイとナツキが特別な存在になったことを示していた。

ラストに照らされていた案山子のマモルは、3人にとっての友情の証であろう。アイの転校によって離れ離れになってしまうが、心の奥底では繋がりに続ける友情を感じた。友達の定義について考えるきっかけとなり、また、友達と会い言葉を交わしたくならせてくれた作品であった。等身大の高校生の姿を、笑いを織り交ぜて描いており、見た人々には大きなぬくもりを与える力を持っていた。